

「良書との出会い『活眼活学』」

公益財団法人 医療科学研究所 相談役

江利川 毅

◆良書との出会い

私が内閣参事官として総理官邸に勤務していた40歳頃の話である。中曽根総理、後藤田官房長官の下で、国鉄民営化や売上税（後に、竹下内閣が消費税として実現）導入が政治課題になっていて、緊張感のある毎日を送っていた。立派な政治家の側で仕事をしながら、自分ももつと成長しなければと思っていた。

その頃、題名に惹かれ手にした本が、『活眼活学』（安岡正篤著）である。その時は知らなかったが、安岡正篤先生は哲学者・思想家で、特に東洋哲学に造詣の深い人である。

『活眼活学』は中国の古典で培われた安岡正篤先生の考えが書かれている本で、肉眼と心眼の説明から始まる。要約すると、「単なる肉眼では目先しか見えません。（肉眼を超えた心眼で）我々は、外と同時に内を見、現在と同時に過去も未来も見、現象の奥に本体を見なければなりません。（そのためには、）変化に富んだ良い交友を豊

かに持つという心掛けが、第一に必要なことです。次に大切なことは良い書を読むこととあります。文明が進歩すればするほど、我々は心眼を開いて、我々の生活、自己というもの、我々の内面的自我というものを、もつと健全にしながら、その上に本来に理性的な、道徳的な、堅実な社会生活、集団生活、組織を持つようにせねばなりません」

私は、心眼という意識を持っていなかったのですが、これを真正面から説いていることが新鮮で、考え方や生き方に新しい視点をいただいたような気がした。

続いて、知識・見識・胆識について説明している。以下、要約引用である。「知識なんて、そのもの自体では力になりません。知識というものは、薄っぺらな脳皮質の作用だけで得られます。しかし事に当たってこれを解決しようという時に、こうしよう、こうでなければならぬという判断は、人格、体験、あるいはそこから得た悟り等が内容として出て参ります。これが見識であります。これを実行するためには、



江利川 毅
TAKESHI ERIKAWA

生年月日 1947年4月13日

出身地 埼玉県

公益財団法人医療科学研究所 相談役
元内閣府事務次官
元厚生労働事務次官
元人事院総裁

【学歴】

1970年4月 東京大学法学部卒業

【職歴】

1970年4月 厚生省入省
1982年4月 厚生省大臣官房総務課長補佐
1985年8月 内閣官房内閣参事官
1988年6月 厚生省年金局資金運用課長
1990年6月 厚生省年金局年金課長
1991年7月 厚生省薬務局経済課長
1993年6月 厚生省保険局企画課長
1994年9月 厚生省大臣官房政策課長
1996年7月 厚生省大臣官房審議官(年金担当)
1996年12月 厚生省大臣官房審議官(老人保健福祉担当)
高齢者介護対策本部事務局長
1998年1月 内閣官房首席内閣参事官
2001年1月 内閣府大臣官房長
2004年7月 内閣府事務次官(2006年7月退官)
2007年4月 日興フィナンシャル・インテリジェンス顧問(7月、理事長)
2007年8月 厚生労働事務次官(2009年7月退官)
2009年10月 埼玉医科大学特任教授
2009年11月 人事院総裁(2012年4月任期満了退官)
2012年5月 公益財団法人医療科学研究所 理事長(2024年5月退任)
2013年4月 埼玉医科大学特任教授(現職)
2014年4月 公立大学法人埼玉県立大学理事長(2018年3月任期満了退任)

いろいろの反対、妨害を断々乎として排し
実行する知識・見識を胆識と申します。胆
識があり、節操のある人物が出てこなけれ
ば、現在の難局は救われません」

◆良書から学ぶ

私は、現在の難局に対応すべき政治家や
行政官は胆識を持たなければならぬと思
い、人のあり方・国家公務員のあり方に
ついて深く考えさせられた。

『活眼活学』を読むまでは、中国の古典
などは敬遠してきたが、長い歴史を経て読
み継がれる古典には、学ぶべきことが深く
蔵されている。明治維新で活躍された方々
の多くは中国古典を勉強しているし、経済
界の重鎮もそのような古典を数多く読ん
で、自分の心の糧にしている。心ある政治
家も同様である。行政に携わる公務員もそ
うあるべきである。

私は安岡正篤先生の著書をかなり読んだ
が、関心を持たれた方は、表題を見て引
かれるものがあれば、是非読んでいただき
たいと思う。その他、西郷隆盛の言葉をま

とめた『南洲翁遺訓』、吉田松陰の言葉を
分かりやすく解説したのもお薦めであ
る。

後藤田正治・元官房長官は、若いころ
『三事忠告』(中国元朝の名臣、張養浩)を
読んだという。安岡正篤先生が『為政三部
書』という題名で全訳されている。

土光敏夫・元経団連会長も中国古典に学
んでいる。四書五経の一つ『大学』に出
くる「日に新たに、日々に新たなり」とい
う言葉を座右の銘にしていたそうである
(『清貧と復興―土光敏夫の100の言葉』
出町謙著)。東芝の社長になって、事業が
軌道に乗ってきたときに、部下から新しい
社訓が必要という声が上がった。土光社長
は「変化の激しい時代に、固定した社訓を
作るのは、新しい考え方を阻むことになり
かねない」と拒否したそうである。読み継
がれている名著は、人としてのあり方・生
き方を教えてくれる。AIの時代だからこ
そ、大事にしたいと思うのである。